

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第25回 まきの さ じ ろう 牧野 佐 二 郎

生物の研究に目覚める

牧野佐二郎は、明治39(1906)年、印旛郡成田町成田(現在の成田市幸町)に父龍蔵、母たまの長男として生まれた。双子であったため、当時は快く思われず、同世代の子どもたちからは仲間はずれにされた。その境遇から、幼少期は庭で花や動物の世話をして過ごすことが多かった。その中で興味を持ったのがニワトリであり、小学生ながら品評会で入賞する程、飼育には力を入れていた。

大正8(1919)年、佐二郎は成田中学校(現在の成田高校)に入ると、自身の悩みの種であった双子について、誕生の理由を理科の先生に質問した。そこで双子が生命の現象の一つであることを知り、生物の研究に興味を持つようになった。幼少期の経験もあってかニワトリの品種改良の研究をしたいと考え、北海道帝国大学(現在の北海道大学)に入学した。

染色体研究の道へ

大学では畜産学を学ぶつもりであったが、相談を持ち掛けた教授に、品種改良を研究するなら基礎知識が必要であると言われ、遺伝の研究をしていた小熊教授を訪ねた。この出会いによって、佐二郎は、染色体の研究者としての道を進むことになる。

小熊教授の下では、染色体による性の決定についての研究に



左/記者たちに囲まれる佐二郎
右/研究がアメリカの新聞で紹介される

明治39年～平成元年(1906～1989)

印旛郡成田町成田(現在の成田市幸町)に生まれる。北海道帝国大学(現在の北海道大学)で染色体の研究を行い、がん細胞に特殊な染色体があることを発見した。多くの功績により、昭和51年には勲二等瑞宝章を受ける。



取り組んだ。卒業後も教授の助手として大学に残り、両生類から哺乳類までさまざまな動物の染色体の研究を行った。

昭和22(1947)年に教授になると、これまでの研究成果を人のために役立てようと、がん細胞の染色体の研究を始めた。当時がんを細胞レベルで調べている研究者は少なく、方法も確立されていなかったため研究は困難を極めたが、佐二郎は今までの研究で培った技術を取り入れ細胞の観察を行った。その結果、がんには特殊な染色体があることを発見し、論文で発表。同27年には生物学の全米大会で講演を行った。

昭和28年、アメリカの研究者と共に、染色体の研究法に新しい技術を導入。一大革命とも言うべき改良を行った。

世界的に染色体研究が大きく取り上げられるようになると、佐二郎も国際的な評価を受け、世界各国の学会に招かれることが増えていった。日本でも専門の研究施設の設定が望まれるようになり、昭和44年、佐二郎を施設長として北海道大学に動物染色体研究施設が設立された。

佐二郎は退職した後も研究を続け、昭和48年、学術上の優れた功績を持つ研究者として日本学士院会員に選ばれた。また、同51年には、勲二等瑞宝章を受章した。

染色体研究に一生をささげた佐二郎は、平成元(1989)年8月6日、83歳でその生涯を閉じた。発表した論文は700を超え、多くの研究に生かされている。

編集後記

夏の土用の丑の日に合わせて、表参道を中心に成田うなぎ祭りが行われています。皆さんは、この土用の丑の日がいつを指すか知っていますか。土用とは立春・立夏・立秋・立冬前の18日間を示します。また、丑というのは十二支の一つで、これは年だけでなく日にも割り振られています。つまり、土用の期間中に訪れる丑に当たる日が土用の丑の日になるのです。夏バテを防ぐためにも、この機会においしいうなぎを食べて暑い夏を乗り切りたいですね。

令和元年7月15日号 No.1391

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。